

第2回基本構想審議会（2/1）における主な意見

■ 時代の潮流

- 地域のつながりの希薄化は孤立につながる。孤立が親の心の健康に影響し、子どもへのDVにつながることもある。子どもの自己肯定感を育てるためには、親の心の健康が大切。
- 人口減少の影響を防止・軽減していくために出生率を上げる取組が必要。

■ 滋賀の強み

- 近江商人の三方よしの精神が、全国から情報が集まる仕組みをつくったことなど、文化財の数だけでなく、世の中のシステムをつくった歴史的な部分にも目を向けてはどうか。

■ 将来の滋賀を考える視点

- 社会・経済・環境の3分野を横につなぐことが必要である。持続可能な社会や地域をつくっていくことが大切であり、この3つの分野をつなぐ人の視点が重要。
- 教育は受けるものではなく、主体性を持って学んでいくという視点が必要である。
- 高齢者を社会的弱者とみなして行政サービスを提供していくのではなく、地域の担い手として地域を元気にしてもらおう力を引き出していくことが必要。
- 政策は行政がするものという現状によって、住民自治の力が下がっているのではないか。
- 南部ではマンション建設とともに人口が増え、コミュニティをどうやって築いていくかが問題となっている。
- 2030年の姿に何が必要なのか、もう少し具体的なものまで踏み込むことが必要。

■ 目指す2030年の姿

- 不登校の問題は、学校やスクールカウンセラーに相談しても対応が難しく、保護者が全国のフリースクールを一人で探す状況である。弱い立場にある人を救う姿が必要と思う。
- 国体終了後も各市町が元気になる取組について数値目標を持つことや、高齢者が元気に活動できる雰囲気をつくりだすことが必要。
- 一人一人を大切にすることに加えて、人と人がつながりを生み出していく姿が必要。また、地域の中でのつながりが、社会の担い手を育成していくことになるのではないか。
- 人の健康は、自然との共生の中で育まれるもの。県産材を身近に使うことで、本県の技術が継承され、人と自然の密接な関係をつくっていく。
- 安心感を与えることが多様性や自己肯定感を育むことにつながり、幼児期から笑顔やあいさつ、ほめるという行為が必要。
- 現代の社会においては、物質的な余剰をシェアすることで足りないものを補うサービスが生まれている。今後、テクノロジーで、どのように世の中を変えていくのかの議論が大切と考えている。
- 全ての県民がICTを活用し、利益を享受できるようにしていくべきと考えている。
- 定住人口が減少していく中、交流人口を増やすためには観光が有効。地域が歓迎して受

け入れることへの理解や自分自身も観光客となって求められているものが何かを学ぶことが必要。

- 人の視点とともに、住む姿を想像することも大切。人口減少と交通などのインフラ基盤は密接なものであり、まちづくりの観点で考えていくことが必要ではないか。

■ 持続可能な開発目標（SDGs）に関する取組

- 県内大学において、授業で取り上げたり、文化祭等でSDGsを広めたりして欲しい。
- 滋賀の学生が一体となってSDGsを発信すれば、素晴らしい取組になる。
- SDGsは現状の評価ではなく、目標に掲げて何をするかという視点で活用すべき。
- 政策をSDGsで分類するのではなく、何が目標に寄与し、何がトレードオフの関係になるかを踏まえ、どう対応したかのプロセスを出すことが、世界のモデルとなる。